構造材等木材の乾燥技術の向上・開発に関する研究（II）
－人工乾燥材に対する木材関連業界の意識－

河崎弥生

1．はじめに

木造住宅の建築用製材品に対し，人工乾燥材の要求度が高まっている。しかし，その要求を出しているユーザーは誰であるのか必ずしも明確でない。

前年度は，木材関連業界等が乾燥材に対してどの様な意識を有しているかという点について検討した。さらには，エンドユーザーである施主に対してもイベントを通して乾燥材に関する啓蒙をはかるとともに，乾燥材に関する意識調査を行った。その結果，乾燥コストを負担してでも良質な乾燥材の使用を望んでいる割合が高いことが明らかになった。しかし現在でも，建築現場では大量の未乾燥材が当然のこととして使用され，乾燥材の使用量には依然として急速な増加が見られない。

今年度も，生産者である製材業界，流通業界，建築業界等の木材関連業界の乾燥材に対する意識調査を行い，乾燥材の使用量が増加しない原因を明らかにすることを試みた。

2．方　法

岡山県内の木材関連業界等に対して乾燥材に関するアンケートを実施した。調査数は，業界ごとに20～30社である。さらに，工務店の経営者や建築士等と意見交換を行うとともに，建築現場に同行して現状分析を行うなど，業界関係者の意識の把握に努めた。

3．結　果

1）乾燥材を求めている割合

第1表に，木材関連業界の乾燥材に対する意識の一端を示す。乾燥材が必要であると回答した割合は，各部材とも，生産者である製材業よりも流通業や建築業の方が概して高い。しかし，建築業でも，土台や間柱等で乾燥材を必要とする割合はかなり低い。このことは，実際に未乾燥材を使用していることを示している。

2）乾燥材に対して期待する乾燥程度

乾燥材に対して期待する含水率は，概ね製材業よりも建築業の方が低い。乾燥材の品質に対するユーザーの要求に対して，生産者（製材業）が対応しきれていない現状が伺われる。流通業は品質管理の優位性を狙って，製品によっては建築業よりもさらに厳しい含水率水準を求めている。

3）乾燥コストの負担

乾燥コストについても，建築業と製材業との間には明確な意識の差がある。建築業が応分のコスト負担を拒むことが製材業の乾燥材生産意欲を低下させていると思われる。前年度に明らかにしたように、施主は無理のない程度の乾燥コスト負担を容認している。なぜ建築業はそれを求めないのかとの問いに対して，現在の厳しい価格競争の中で乾燥材使用をオプションとして示すことは，標準仕様の住宅が低品質であることを自ら示してしまうことになるという矛盾を抱えているためとの回答を得た。この主張は，未乾燥材使用によるリスクを施主に対して告知すること無く，一方的に背負わせてしまう論理であるように思われる。

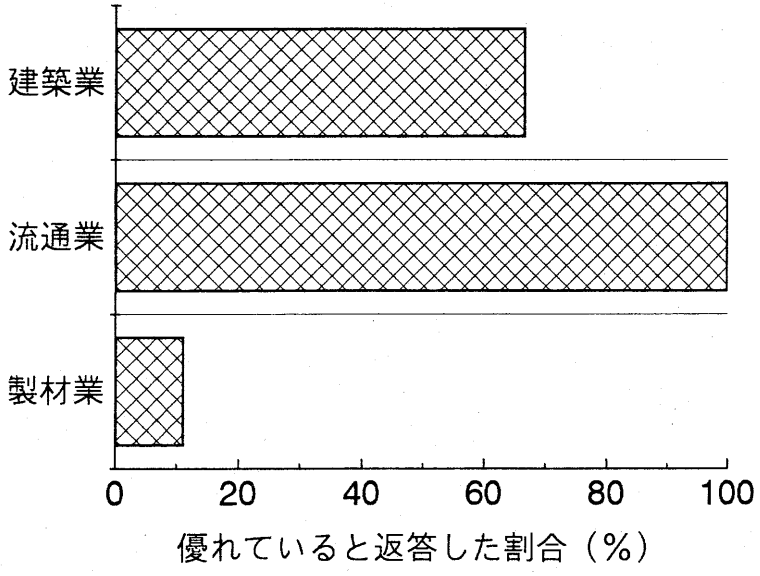
第１表　木材関連業界の乾燥材に対する意識

部材		乾燥材が必要であると返答した割合（%）			期待する主な含水率（%）			希望（許容）した上乗せ乾燥経費率（%）		
		製材業	流通業	建築業	製材業	流通業	建築業	製材業	流通業	建築業
構造材	通し柱	92	100	100	25	15	20	15	15	10
	管　柱	100	100	100	20	15	20	15	15	10
	梁	58	100	100	25	20	20	15	15	5
	土　台	58	100	25	20	20	20	15	15	5
	大引き	50	80	50	25	20	20	15	15	5
羽柄材	たる木	25	60	75	25	25	20	10	10	5
	間　柱	92	80	50	20	15	15	10	10	5
	根　太	42	40	75	25	15	20	10	10	5
	筋かい	75	40	50	25	15	20	10	10	5
造作材	敷　居	92	80	100	18	15	15	10	15	10
	長　押	75	80	75	18	15	15	10	15	10
	壁　板	83	80	100	20	15	15	10	15	10
	床　板	67	80	100	20	15	15	10	15	10

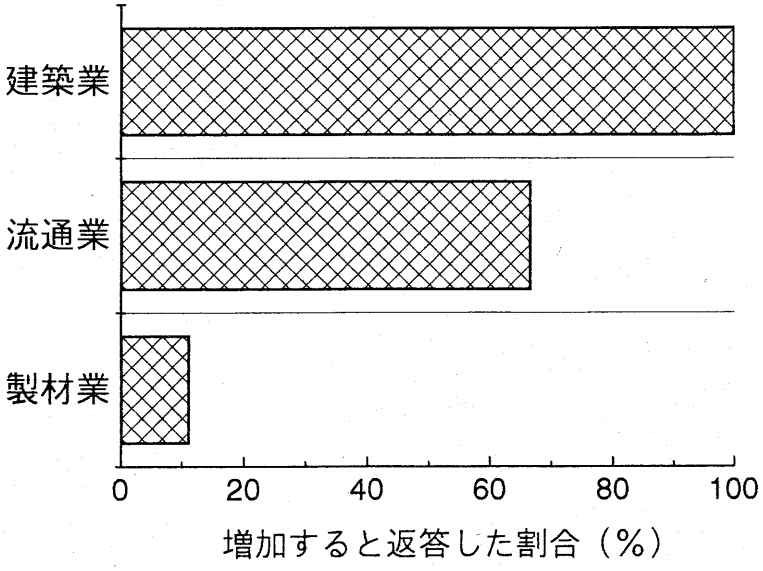
4）エンジニアリングウッド（ＥＷ）に対する認識

第１図及び第２図に，ＥＷの今後の見通しについての回答を示す。製材業界の楽観的な認識とは別に，建築業界は安価で高品質なＥＷを視野に入れていることが明白である。製材業界自らが現状を打破する努力をしない限り，寸法安定性の高いＥＷを求める流れはますます大きくなっていくものと推察される。

以上のことより，人工乾燥材の普及に対して，生産者と工務店などの中間ユーザーとの間に必ずしも共通認識が存在していないことが明らかとなった。特に，工務店の乾燥コストに対する論理が，人工乾燥材の普及を妨げている場合が多いように思われた。今後は，工務店を始めとして，一般消費者をも含めた人工乾燥材使用に対する合意作りを行う必要がある。



第１図　ＥＷは製材品より優れているか？



第２図　ＥＷの使用量は増加するか？